
「天使の唄」

風音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「天使の唄」

【Zコード】

N4317B

【作者名】

風音

【あらすじ】

今年の冬は寒いらしい。11月なのに。文化祭前なのに。。。佐倉勇一は考える。病に苦しむ思い人が文化祭を楽しむ方法を。緋水美月は考える。思い人に負担をかけない方法を。そして、考える者はもう一人。。。現代的恋愛ファンタジー。

「プロローグ」

世界が、世界を構築する全てが、ただ一人の「者」によつて作られているのならば、

それはすごく、悲しいことなのではないのだろうか。

人の運命は決められていたとしたら。それを知らずに人は生きているとしたら。

やはりそれも、悲しいことなのだろうと思つ。

運命という網に縛られずに生きている人がいたとしたら。

その人は幸せなのだろうか？ それとも 。

思い出は、いつも綺麗なものしか残らない、とよく言われている。小さい頃の記憶を思い返せば、幾つか思い当たる部分があるかもしれない。

例えば、初めて自転車に乗れた記憶。

例えば、テストで初めて百点を取れた記憶。

例えば、友達と小さい頃、日が落ちても遊んでいた記憶。

たわいもない話で笑いあつた記憶。

ケンカして泣きあつて。そのあと仲直りした記憶。

そして。

死んでしまつた人との思い出の記憶。

思い出は、いつも綺麗なものしか残らない。

どこかの本で適当に流し読みをしただけなので、あまり詳しいことはよく分からぬが、人間の頭の中というものは、悪いこと、辛いこと、苦しいことは防衛反応というもので大体は消えてしまう。楽しかつたこと、面白かつたことが優先されて思い出のスペースを埋めてしまうらしい。

何とも都合のよいつくりをしていると思う。自分も一人間だが、この事を聞いた時、「いやあ、ヒトの脳とくらものは実にあっぱれ

であるなあ」と幼心に思つたことがあつた。

田の丸の扇子を開いて馬鹿踊りしたい氣分である。

だけど。

だけど、それはあくまで一般論。自分は違つた。悪い記憶ばかりが優先されて根強く頭に残つている。

もともと良いことなんて少なかつたから。

それはもう、記念すべき小学一年生の入学式になど出でていないし。公園の砂場で砂の山を作つて、「トンネル開通」とやらもしたことがない。

記憶にあるのは、白い壁と白いベッドと白い服を着たおねーさんとおにーさん。

そして、長い長い夢の中で見た、白と黒の記憶。あれが自分の中で覚えている、最後の悪い記憶。今でも田を開じるとおぼろげに現れてはぼやけてぐるぐる回る、嫌な記憶。

きっと、体に残る痕と共に一生残るのだろう。

单刀直入に言つてしまえば、手術の合間に麻酔で眠らされて見ていた夢の内容なのだけれど。

このように、自分にはほぼ「いい思い出」とやらがないのである。ほぼ、なので、ないわけではない。消してはならない「いい」思い出もある。

それは大切な思い出であり、今の自分の性格は、この人との思い出が形成したと言つても過言ではないはずである。…多分。

だから、自分は鶴のように恩返しをしなければならないのだ。自分は子犬のように忠誠を誓つのだ。

例え何があるうとも…。

……いや、それは少し言ひ過ぎなのかも知れない。とにかく。

この人が人生のゴタゴタに差し掛かつたり、捕まつてしまつたりした時には、自分が側にいてあげて、助けになつてあげようと、

もつひとつわけである。

「**タマリのアレルギー**」(過敏性)

虫の頃に書いたものですが。……今よつなんかつかこよつな気がするのです。

「おるみの田のじ」と

高校一年の初冬の、いの年一番の冷え込みの日であった。毎日毎日変わり映えしない退屈な授業を終え、佐倉勇一は私立桜縁学園の昇降口を出た。

なるほど、今日は寒い。制服の上にはコートを着ているし、マフラーと手袋は既に常備して置かないと多分凍え死んでしまうだろう。今思えば、朝のお天気お姉さんの妙な自信を鼻で笑っていた自分が恥ずかしい。空に雲がなければ少しばらかと思われるのだが、残念ながらどんよりと鈍色の雲が空全体を覆っていた。なんだか気が滅入つてしまう。

はあ、とため息をつきながら、勇一は外の部活の邪魔にならないよう、歩き始める。

決して勇一は部活サボリではない。一時的な帰宅部に属している。本来ならば演劇部であり、脚本を書きながら役者をこなすというと充実した生活を送っていたわけなのだが、その生活を捨てなければならないほどやらなければならぬことが、彼にはあった。

勇一は人と車のほとんど通らない道を黙々と歩き、学校の近くにある水口総合病院へ向かう。

いつも思うのだが、いくら都会に近いといつても田舎町であるここに、桜縁学園みたいな中高一貫学校や、水口総合病院のようなどう考へてもこの町に不釣合いな大きい建物があつていいのかと思う。なにしろ、大きい建物などこの町にはこの二つしかないわけだし、あとは住宅街と商店街が広がるばかりだ。不景気な世の中と騒がれてはいるが、そんなことを感じさせない財政力がこの町にはある。裏金もあるのではないかと深刻に考へてしまう。

そんなバカなことを考へながら、総合病院の自動ドアをくぐる。どんな種類かは知らないが、薬品の匂いが病院に来たなあ、と感じさせた。匂いが鼻を刺激して、思わずくしゃみが出てしまうのをこ

らえる。毎日来ているが、どうもこの匂いだけは慣れない。

院内は暖房が効いていたので、手袋とマフラーを取りながら、慣れた手つきでロビーの右手奥にあるエレベーターのボタンを押し、六階へと移動する。ほぼ毎日来ているので、目をつぶつてもできる動作だ。

ちーん、といつ音と共に六階へと降り立つ。この階はほとんどが病室で、この時間帯はあまりにぎやかな時間帯ではなく、左右のどちらを見ても、白く、長い廊下が黙つて道を伸ばしている。殺風景な印象を受けるが、病院が殺風景でないものもある意味怖い。

例えば、白い廊下がいやにカラフルでレインボーだつたり。派手だな。

夜の暗くてただ非常口の緑のランプだけが灯るこの廊下とどちらが怖いだろうとを考えたが、馬鹿馬鹿しいので思考を止めた。友人の森岡が、「なんで水口総合病院というでかい病院にさえもピンクやブルーの白衣のナースがいないんだっ！」間違っている、この市は何かが間違っているぞお！と嘆いていたのを思い出したが、それも止める。森岡ごと記憶の彼方まで葬り去る。

大体、『ピンクやブルーの白衣』といつ言葉からして間違っているだろう。

…白衣じゃないじゃんよ。ピンクやブルーだつたら。

頭の中の森岡に致命的なツッコミを打えたところで、止めていた足を動かし始め、目的の病室を手指す。エレベーターから、左に曲がつて三番目の病室。いつもここに来るまでにいろんなことを考えてくるのだが、今日は森岡の登場で疲れた。こういうのを人は気疲れと呼ぶのだろう。なるべく病室では元気な姿を見せていたい。相手に余計な心配はかけたくないから。

ドアをノックする前に深呼吸を一、二回ほどして、気疲れを意識的に押さえてからノックをする。中から小さめの声で、「どうぞ」の返答が返ってきた。

「ちーす、美月。元気してるか?」

「元気じゃないです。元気だつたら病院にいる必要はないと思つけど」

ドアを開けて病室に入つて早々、いきなり皮肉を言われた。正論だから言い返すこともできない。

白い壁に、白いリノリウムの床。ベッドの近くに申し訳程度に置かれた物置き用と収納用を兼ねた小さな棚。上に置かれた色とりどりの花が引き立つてはいるが、基本的には廊下と変わらない殺風景な病室。

緋水美月は、青い水玉模様のパジャマを着て、白いベッドに上半身を起こして勇一の方を見ながら不敵に笑っていた。

彼は室内に数個あつた丸椅子の上にバッグを置いて、その中からノートを数冊取り出すと、美月の頭をノートで軽く叩いた。

「素直じゃない。今日の授業分のノート、見せてあげないよ?」

「あ、それは勘弁してください。私から唯一の楽しみを奪う気?」

彼女はノートを勇一の手からひつたくると、一冊目のノートを開き始め、真剣な顔で読み始める。勇一は美月の横顔を眺めつつ、彼女がノートを見終わるまで、勇一は今度の演劇のための脚本を仕上げるために棚の上にノートパソコンを置いて指を動かし始める。

この過ごし方が、ここ最近の口課となつていた。

美月が突然倒れたのは去年の夏のことだった。彼女も、心臓の機能が悪かつたのである。

幼い頃からずっと一緒に、お互いに助け合ってきた勇一は、当然、彼女を見捨てることはしなかつた。もともと勉強家だつた美月のために授業をしつかり受けてノートを取り、彼女の勉強が遅れないようにもしたし、病室でボーッとしていてはつまらないだろうと、部活の仕事に差し支えのない程度に彼女の話し相手にもなつたりしている。

病院での入院生活がいかにつまらないものであるかは、勇一もよく理解していた。

長い黒の髪。外で走り回るのは好きではなく、しかも長い入院生活のせいで雪のようにきめが細かく、白い肌。そして細い手足。顔立ちも整っていて典型的な和風美人と称され、学園では定評があるのだが、変に気が強いせいで見舞いに来た人を片つ端から追い出して、今では数人の『親友』だけがここに訪れている。人に気を使われるのが嫌いなくせに。

「勇一、どうかしたの？ 指が止まっているわよ」

美月のノートに落としていた目が、こちらに向かっていた。わずかに首を傾げている。

「もしかして、気分悪いの？ 今日は寒いって言ってたから…」「いやいや、次の文をどうしようか考えていてね」人がいつもと違っていると必要以上にお節介を焼いてしまう人。それが、緋水美月の真の姿。

勇一は考えを悟られないように慌てて指を動かし始め、リズムよくキーを叩きながら、場当たりで思いついた言葉で逃れようとする。彼女もさすがにエスパーではなかつたのか、納得しつつノートを開く。

「そういえば、もうすぐ桜緑祭だもんね…。さつさと脚本完成させて劇の練習をしなきやならないのかあ…」

「まあ、ね。これから忙しくなるからめんどくさいよ…」

「勇一はダメだなあ。普通はそういうところに青春というか生き甲斐を感じるものだよ？」

美月はびつと人差し指を立て、姉が弟に諭すような口調で言う。

一瞬だけ、同級生のくせに…と思つたが、言葉の裏にある彼女の想いはすぐに読み取れた。

桜緑祭とはつまり文化祭のことで、まともな田舎町のここにひとつでは一年のうちに最大のイベントといつても過言ではない。もちろん、学園の生徒のほとんどは楽しみにしているし、実際自分も楽しみにしている節がある。

しかし、美月はどうだろうか。

彼女が入院したのは去年の夏。つまり、去年も、そして三週間後に控えている今年の桜緑祭にも参加できないということだ。桜緑学園は中高一貫なので、彼女は中学の時に桜緑祭は楽しんでいたが、高校になつてからは一回も楽しんでいない。あまりにも不憫だ。それに、桜緑祭の準備が本格的になつたら、自分は今のように頻繁にここには来れなくなる。美月にノートを見せられなくなるのは痛い。彼女と話せなくなるのは痛い。

彼女の望んでいることをしてあげられないのは、すじく痛い。

キーを叩く指は止まっていた。去年は彼女に何もして上げられなかつた。今年は何かしてあげたい。桜緑祭の日が来る前に、彼女の心臓に負担をかけず楽しめる方法を。

「また指が止まってる。勇一、今日は何かおかしいよ？」

「はは、そうかも」

こんな感じでは執筆も進まない。脚本を書くことを諦め、パソコンの画面から美月のほうへ顔を向けると、彼女の立てられた人差し指が勇一の額に当たられた。思ったよりも指は冷たく、じんわりと寒さが背を伝つて思わず身震いしてしまう。

「…指、冷たいんですけど。もう少し部屋の暖房効かせたら？」

「これ以上暖かくなんてならないよ。正常な体していないんだしさ」

彼女は指を勇一の額から離し、病室に負けないくらい白い自分の手の平を見ながら、愁いを帯びた笑みを浮かべる。

その笑みが、どうにもやるせなくて、切なくて。見ていて心が押しつぶされそうだった。

気まずい空気が室内を包む。なぜこんなことになつてしまつたのだろう。きっと森岡のせいだ。あいつが今日のいろいろと日常や世間の事について考えていたのに、あいつの変な発言一つ雰囲気がおかしくなつたのだ。明日学園へ行つたら真っ先にあいつの息の根を止めなければなるまい。

「そりゃいえ、今回の劇のテーマって何なの？ まだ聞いてなかつたけど」

彼女も気まずい雰囲気を感じていたのか、静寂を打ち破るよう話題を持ち出した。

「あ、うん。桜縁祭なら思い切り部費使っても何も言われないからね。かなり豪華に物凄い恋愛物でもやろうと思つてさ」

この市のおかしな財政力は桜縁祭にもかけられているらしい。他の文化祭を見たことがないから判らないが、見たことのある人たちの意見から察するに、とにかく「すごい」らしい。何がどうすごいのか、自分には判りかねる所なのだ。

ただ、学園の講堂にある演劇に使える全ての設備を使えるのがこの時期だけなので、使えるだけの設備を使って人に見せられる最高の劇をやってみようかな、と思っているわけである。

「恋愛物…ね。勇一の作った脚本で今まで一番ウケが良いのが恋愛物だつたもんね。がんばってよ。…あまり、妄想のしそぎはしないでね。引いちゃうから」

果たして、今のは励ましか、けなしの言葉か。たぶん後者だろう。美月はクスクス、と微笑してから、時計を見た。そして、ノートを揃えて勇一に渡す。

「さてと、そろそろ勇一は帰宅の時間です。暗くなるのが早くなり始めているから、気をつけて帰つてよね？ 交通事故にあつて打ち所が悪くて脳死状態、なんて冗談にもならないですからね」

確かにそれは冗談にはならない。勇一は苦笑し、窓に目をやつた。本当に暗くなり始めている。心なしか雲行きも怪しい。

「あらら、雨降りそうだね…。念のため傘貸してあげるよ。明日返してくれればいいから」

彼女も窓の外の雲行きの悪さを察知したのか、勇一がバッグの中にパソコンとノートをしまっている間に、ベッドの下に手を入れてごそごそと動かし、ほとんど使われていなさそうな真新しい薄い水色の傘を取り出した。

…「どうせそんなところにあるのかはあえて訊かないことにしているわ。

「サンキュー。恩に着るよ」

バッグの紐を肩にかけ、傘を受けとると、病室を出ようとアノブに手をかける。

アノブに目を落とす。言わなければならぬことがあった。

「今年の桜縁祭、美月も楽しめるように、オレなりに何とかしてみる。だからさ、期待して待つて欲しいな」

「うん、ありがとう。…」「めんね。私はいつもあなたに迷惑をかけちやつてる」

「馬鹿。美月がそれを言つたら、オレはすこし迷惑を君にかけてることになるんだから」

「ふふ。そうかもしね」

美月は小さく笑う。アノブに目を落としたままなので、彼女が本当に笑っているのかは判断のつかないところだ。

「だから、そんなこと言つなって。美月は絶対治る。少なくともオレは信じてるからさ。」

こつちも頑張るから、そつちも頑張つてよ」

「うん…。頼りにしてるよ、勇一」

一度だけ振り返る。だが彼女は窓の方を向いていて、表情をつかがい知ることはできなかつた。彼女の背中が、寂しく思えた。「任せおいでよ」と小さく呟き、勇一は病室を後にする。

病院の入り口まで来ると、既に雨がポツポツと降り始めていた。美月から借りた傘を差して家に向かつて歩き始める。家までは徒歩で二十分くらい。田舎町らしく夜になつてもほとんど街灯がないのでかなり暗く、そのせいか歩く人も少ない。夜道というのほどこか不安感を覚えるもので、できれば勇一も早く家に帰りたかった。雨のせいで寒い気候もさらに寒く感じる。マフラーをしているのに冷気が首筋に入り込んできて、体も暖かくならない。歩くスピードを少し速めて、歩く時間を短縮する。

どうやって明日森岡の息の根を止めてやるうか。

どうやって明日も楽しめる桜縁際にしてやればいいのか。今のこと、勇一の頭にある考えはこの二つだった。できかけの水溜まりを通学指定に靴で踏みつけて水しづきを飛び散らせながら歩みを進める。さすがに道路はコンクリートで舗装されているので靴が泥まみれになるようなことはない。と言つても、濡れはするが。自分の頭は一つのことを考えると言つのはどうにも苦手みたいなのが、一つのことを頭に思い浮かべるとものすごい処理能力を発揮する。

事実、通称『森岡滅殺計画』の半分は完成し、『美月お祭り参加計画』は三分の一は思い当たつていた。後者はともかく、前者は明日実行すればよい。

傘をくるくる回しながら、明日の楽しみを意味を実感する。無事計画が成功した暁には、たっぷり香典を包んでやろう。

学園を過ぎて、十字路を右に曲がる。曲がった先にはきっと大正とか昭和の初めに立てられたのだろう、木造の二階建ての大きなお屋敷がある。母親の話では、昔に周辺の土地を管理していた地主の家らしい。

勇一はこの屋敷に何人の人が住んでいるのか知らない。一人は知つてゐる。毎朝登校時、この辺りをぶらぶら散歩している、腰の曲がつた今にも死にそうな爺さん。最近は桜縁再準備のため、少し早く登校しているので姿を見ていないが、きっと今朝も、あのおぼつかない足取りで散歩していたのだろう。

なぜこんなことを今考えたのかというと、屋敷の前に客人がいたからである。暗くてよく見えないが、門の前で立ち止まつている人影は確認できる。少しづつ歩みを進めていくと、だんだん輪郭がはつきりしてきた。

そして、姿が見えたところで勇一はその姿を不審に思い歩みを止めた。

急に、雨が傘にあたる音が大きくなつた気がする。

女の子が、この寒くて雨の降る闇の中、開かれることのない門を見つめていた。

誰が見ても不審に思つだらう。傘を差していない。

つまり、彼女は雨ざらしになつてゐるのだ。

それだけでも寒そうなのに、服装がさらに寒そだつた。というか奇抜だ。

キャミソールを少し大きくしたような服しか着てないよう見え
る。いや、実際は腕にも膝にも衣類は着てゐるのだが、どう考
えても冬の夜にその格好でいたら寒いだらう。

自分だつたら、真つ先に風邪を引くかもしけれない。

いや、あんな服装でも着るつもりはないけど。

ていうか、服といい、傘を差していないといい、あの子は風邪を
引かないのだろうか？

どんな表情をしているのかと思ったのだが、暗くて確認できない。
が、髪形がツインテールを言つことと、体のライン的に、自分より
も年下と推測することができる。

では、なぜこの女の子が開かれない門の前に立っているのだろうか予測してみる。個人的には、あの死にかけ爺さんの孫娘というのが一番有力な説だと思う。しかしあの爺さんに、悪く言えばこんな非現実な格好をした孫娘がいるだなんて…。世の中はミステリアスに創られているなあ、と感心してしまう。

とりあえず、この女の子を爺さんの孫と仮定した所で、こんな所で一体何をしているのか、といつ疑問だけ残つた。あんな格好で傘も差さずに雨ざらしになつていて。

ふと屋敷の方を見る。自分の身長より少し高めの塀に囲まれていて、しつかりと確認できたわけではないが、多分八десятくらいの確率で屋敷の明かりは一つも灯つてはいなかつた。

おかしい。

勇一はここまできてよつやくこの考えにいたつた。

最初は頭の片隅にあつた考えが、今は頭全体を占拠している。

何かがおかしかつた。自分の予測や推測は全部外れている気がする。

静かに降る雨の闇の中、勇一は寒さも忘れ、今を現実ではないのではないだろうか、と認識し始めていた。

何分間の間立ち止まつていたのだろうか。呆然と女の子を見ていた勇一ははつと我に返り、自分はなぜただの棒つきれのように突つ立つているのだ、と自己嫌悪に陥る。

思い切つて声をかけてみようか？

しかしながらと訊けばいいのだろう？ 門をただ見つめてぴくりとも動かない女の子に、『あなたは誰ですか？』と訊くのは馬鹿馬鹿しい。『何してるの？』と訊くのも微妙だとは思うが、この言葉に以外に思いつかなかつた。

勇一は決意して女の子の方へ向かつて歩き出す。本当に動かないので、等身大のフランス人形みたいな子に声をかけるのは、なかなか勇気のいることだ。だがこの子に自分が不可抗力といえ、自分が見ていたことを言わなければ、なんとなくアンフェアみたいで罪悪

感が残る。

後々の後悔を残さないために、勇一は息を吸い込む。

女の子は、勇一に未だ気がついていない。すぐ後ろにいるというのに。まるで最初から人間に興味がないかのように。

彼女の背中からは、例えようのない莊厳な雰囲気が感じ取れる。

勇一が言葉を発したのと、女の子が一步前へ足を踏み出したのは、ほぼ同時だった。

「ねえ君、こんな所で、何やつてるの？」

なんか下心見え見えの軟派が街で適当な女の子に声をかけるセリフと同じ感じがする。

だが声をかけることができた。女の子は本当に勇一の存在に気がついていなかつたのか、全身を震わせてこちらを振り返つた。

大きく見開かれた彼女の瞳と女の子と目が合つ。

……視界が一瞬、真っ赤になつた。

……彼女の瞳は、紅かつた。

予想外の事に、思わず怯んでしまつた。まさか瞳が紅いとは考えもしなかつた。彼女は、勇一のそんな考えはお構いなしに、目はこれほどかというくらい大きく見開かれ、口も半開きにして彼を見ていた。声をかけられて驚いているようだつた。

「……オレの顔に、何かついてる？」

勇一は女の子に自分の顔を見てそんな反応をされたのが、正直シヨツクだつた。顔にそんなに自信があるわけではないが、さすがに多感なお年頃の心にグサリとくる。それでも彼はめげないで次の反応を待つた。

しかし彼女は、勇一の質問には答えず、大きく見開かれた瞳を化け物を見るかのような目つきに変えて彼をつま先から頭のてっぺんまでを人を品定めにするように見た。

そして。

「アナタ、私が見えるの？」

「へ？」

言つてゐることの意図を理解するのに数秒かかった。彼女はつま
り、「あなたは私の姿を見ることができるのでですか?」と質問した
のだろう。もちろん答えはイエスである。視覚障害者ではないのだ
から。

「とりあえず…、こんな雨の中で傘も差さずにいたら、風邪引いち
やうよ」

勇一は傘を自分だけではなく彼女の雨よけにもなるようにもつて
行くと、バッグからスポーツタオルを取り出して、女の子のツイン
テールの頭の上に乗せた。

ここにきて、彼女の髪の色は珍しいことに気づく。普通は単色が
普通と思うのだが、彼女は白と黒に分かれている。しかもテールご
とに律儀に色が分かれている。

彼女は例も言わずにしつと濡れた頭をタオルで拭く。よく見
れば、彼女の服も黒と白で分かれている。服だけではなく、ソック
スも、靴も同じ。片方が白で、片方が黒。どこかの家から漏れる光
で、ほんやりと確認できる。

一番目を惹いたのは、彼女の首についている首輪なのだが。

「にしても、自分も使い古されたようなセリフだつたけどさ、君も
負けないくらい使い古されたセリフだつたね。オレは、君の姿を見
ることができた。で、オレの質問にも答えてほしいんだけどな」

勇一は、頭二つ分くらいはある身長差を解消するため少しかがん
で言つ。

「待つてる」

彼女は勇一に顔を見られたくないのか、うつむきながら再び彼から
背を向けてしまう。

「待つって、何を?」

「アナタには、関係ない。どうか行って」

カチンときた。年下(だと思つ)のくせして、タメ口どじろいか命
令口調で拒絶反応をされた。変なプライドが体の動きを支配する。
この場を動きたくなくなつた。

頭のどこかで、この状況がどこか非現実めいでいるぞ、と警鐘を発しているが、理性でそれを却下する。

「そう言わると、嫌でも君が何をしようとしているのか見たくなりんだけどな」

「勝手にして頂戴。私にはやるべき事があるから、邪魔しなければ問題はないわ」

やるべきこととは、何なのだろう。」うしてただ門を見つめて立っていることがやるべき事なのだろうか？

と、勇一は考えてみたが、どうやら違つたらしい。

女の子は足音もなく突然歩き出し、礼儀も何もなく、門を静かに明けて、屋敷の敷地内に入つて行つてしまつた。

「え、あの、普通インターホンとか押すものじゃないの？ 君、この家の子なの？ ねえ！」

勇一は慌てて彼女を追いかけて無礼と知りつつも敷地内にはいつてあたりも見回し、屋敷を見上げる。屋敷はやはり明かりは灯つておらず、さらに入人の気配が存在しなかつた。

辺りのあまりの暗さに、思わず背筋は寒くなつて震えてしまう。冷氣とはまた別の寒さだ。鳥肌が立つ。暗闇の中の孤独は、どこかに一人で取り残されたという戸惑いと恐怖感を覚える。こんな所にずっといたら兎みたに心細さで死んでしまいそうな気がしてくる。勇一は気を奮い立たせて、暗闇の中目を凝らして女の子を探した。どこにもいない。

おかしい。もう一度よく探してみる。やはりいない。屋敷の中へ入つて行つたのだろうか？ いや…少なくとも、物音は聞こえなかつた。裏へ回つたのだろうか？ 彼女はそんな足が速いのだろうか？ 何かが、おかしい。

何かが、おかしかつた。

「彼のファンタジー」

「この状況、どこか非現実めいでいるわ。

本能が、頭の中でそう自分に語りかけてきている。これから何が起ころのか、全く予想がつかないのではないか。自分が安全を確保できる手段は一つだけ。即刻この場から立ち去ってしまうこと。本能はさらに言う。きっとパラレルワールドにでもミステリーゾーンにでも一步足を踏み込んだに違いない。今引き返せばまだ間に合うのだ。

暗闇の中で、孤独から来る恐怖感とは違つ恐怖感が勇一を襲つ。傘を持つ手が震える。

引き返そう。あの女の子は幻だ。きっとそつなんだ。今この屋敷から出れば、日常に戻ることができる。うん、そう。引き返そうか。

振り返つた。

歩もうとする足が止まつた。

田の前に、さつきの女の子が立つていたからだ。

出口は塞がれた。もう、平凡な日常には戻れないかもしだい。

「やるべき事は終わつた。ホントは帰らなければいけないけど、私はなぜアナタが私を見ることができるのか興味を持つた。アナタは：ただの人間じゃない」

「残念ながら、普通の人間なんだけど」

「嘘ついちゃ駄目」

女の子の顔はタオルで隠れていたが、その声は外見年齢に反して、はつきりと芯の通る声だった。フランス人情のような出で立ちをしているくせに、日本語が上手い。

しかし、初対面の子にあなたは凡人じゃない呼ばわりされ、しかも確信を持たれたように嘘をつくなどと言われた。

でも、確かに、この子の言つていることは、例え当てずっぽうだ

つたとしても当たっているのかもしれない。

「……分かった。本当の事を言つよ。だけどその前にオレの質問にいいかげん答えて欲しいんだけどね」

交換条件。自分の手元の情報を生かして、この子は一体何者なのかを聞き出さなければ。

日常へ戻ることは半分諦めかけていた。ミステリーゾーンでも、パラレルワールドでも、足を踏み入れたなら出てしまうのは邪道な気がする。よく自分は普通の人が経験しない事をいろいろ経験して来たな思つてているが、まさか常識外の事を経験するとは思つていなかつた。思つていなかつたが腹は決めた。

自分で驚きだ。数瞬前怖がっていた時とは偉い違いだ。自分の環境適応能力はもはや才能だな、と思つてしまつ。

しかし。

「じゃ、いい」

女の子はこの言葉で全てを拒否した。なんと言つか、気難しくて美月より扱いに困るタイプだ。とりあえず事情を訊いてみる。

「なんでそんなに君は自分の事を話したがらないの？ 話さなければ何も判らないよ？」

「主の命令。話しちや駄目つて言つたから。私は主の命令は守らなければならぬ」

「……主？」

彼女は相も変わらず勇一と顔を合わせようとしない。声は無感情そのものだし、外見より大人びて「る」と思つてしまつ。だがそれが、主従関係故だとは。

「そつか、なるほど。事情があるなら、仕方ないね」

初めてこの子に親近感がわいた。得体の知れないフランス人形の人間らしさをひとかけら、知ることができたから。感じていた非現実さが、ほんの少し現実さを取り戻す。気のせいか、雨の勢いも弱くなつた気がする。

「ただ、どうしても私のことを知りたいなら、明日、ここに来てみ

るといこよ。私という存在が何の役割を果たしているか、少しほは判ると思ひ」

私の口からは言えないけれど。そつ言葉が続くと思つた。彼女の言葉には先程とは違つ神妙さがあり、言つていいべきか、といつ困惑した表情をしていた。勇一にとつては、彼女が自分に自分の事を伝えようとしてくれているのがなんとなく嬉しかつた。

恐怖感はなくなつっていた。目的も変わつていた。雨もやみ始めていた。

彼女は遠回しにも自分の事を伝えようとしている。交換条件だ。自分も遠回しにでも言わなければアンフェアになつてしまひ。何かないのかと、神経を集中させる。

「じゃ、オレはもう行くよ。あー、そつだ。君の名前を教えてくれる？」

「テルル。…このタオル、明日あなたを見たら返しに行く」
「分かつた。じゃあテルル、君がこの屋敷の住人じゃなかつたら、速くこの屋敷の敷地内から出た方がいいよ」

歩みを進める。束の間の日常に戻るために。今日と明日は、見る世界も過ごす世界も一味も一味も違つと思ひ。できるだけ、さりげなく。遠回しに。

「今から八分と三十七秒後、この屋敷に人が来るからね」

彼女がどういう反応をしたのかは判らない。何も気付かなかつたのかもしれない。

門を出た所で、最早意味の無い物となつていて、開かれた傘を閉じる。今日は疲れてしまつた。まずありえないと思つたことが多々ありすぎた。

きつとこれは、森岡のせいに違ひない。

うん。きつとそうだ。

勇一はほとんど罪のないだらう森岡へ思いを馳せながら、帰路を

無いだ。

「勇一！ お前は桜緑祭の店、何出したい？」翌日、いつもと変わらず一年四組の教室に入り、一時限目と一時限目を見事な色ペンのしようと巧みなまとめ方によつてノートに「写し終わった、休み時間のことだった。級長の一ノ富は窓際の前にある勇一の席へ来て、ノートの切れ端とシャープペンを手に勇一に質問してきた。

「店？ ああ、模擬店か。そうだな…」

数学のノートと色ペンを整理しながら考えてみる。一ノ富はアンケートの途中結果を見ながら、「今の一一番は焼きそば屋で、その後が喫茶店だな」と参考意見を出してくれるが、なんとなく、どっちでもいいような気がした。

「んー、じゃ、喫茶店に一票。飲み物出すだけの方が楽でしょ？」「了解。ふむ。さすが勇一。弱き者の味方。長い物に巻かれないなあ」

褒めているのかけなしているのかよく判らない発言をしながら、彼はアンケート集計紙であるノートの切れ端の『喫茶店』と書かれた隣に正の字の四画目を付け足す。

次の授業で使う資料を取り出そうとしてバッグを覗く。常備のノートパソコンを見た時、「あ」と呟いた。

「一ノ富、オレに模擬店云々を聞くのはいいんだけど、そんな手伝えないとと思う」

「どうしてだ？ もしかして、サボりか？」

一ノ富はペンで自分の肩を叩きながら苦笑する。勇一もつられて笑う。

「部活だよ。演劇部だしさ。今も脚本書いてる途中だし、書き終わったら部員の指導や、自分も演じなければならないし。まあ、当口までここぶるハードな日々が続くのは間違いないと思うよ」

桜緑祭は一応は文化祭という名目があるので、ちょこちょこと眞面目に文化祭用の研究発表などの掲示や、部活の活動の記録の掲示をしている所もしっかりある。演劇部はその中での主力的な役割があり、桜緑祭でも重要な「イベント」の一つである。

「そういえばそうだつたな…。まあ、俺たちはお前一人が欠けてもやれることなんだ。演劇はお前が欠けてちゃ成り立たない。くれぐれも俺たちのことは気にしなくていいぞ」

「あ、でも、休憩時間になら手伝えるよ？ せっかくクラス単位での出し物だしさ、何か手伝わないと悪いよ」

去年は脚本を一人で書かなくて良かつたので、クラスの出し物であつた「コレが究極のカレー！ フラインド」（命名は森岡）とかいうフライドチキンカレーとかフライドポテトカレーとかを取り扱つた店を手伝えたのだ（なぜかよく売れた。今の世の人は油っこい物が好きなんだなあ。と実感した）。今回は準備の時から手伝えない分、当日に何かしなければクラスメート達に悪い。

「余計なことを気にするな。桜緑祭の演劇といつたら、人気百貨店の超目玉品みたいなモンじゃないか。明らかにそっちを大事にしどけ。いいな？」

「ノ富なりに気を使つたのだろう。わざわざ演劇に専念できるよう手配してくれたのだ。ありがたいことこの上ない。演劇に美月お祭り計画が重なつていたのだ。苦労の種をこれ以上増やすのもどうかと思つた。

だがそんな気遣いも無視して、近くの席で一人の話を聞いていた数人の女子の軍団が、「それは聞き捨てならない」という顔をして身を乗り出してきた。

「勇一くん、お店手伝ってくれないの？」

「困るよお、うちのクラスの男子で料理で頼りになるの、勇一君と森岡君位なんだから」

そう、勇一は、美月の下僕としては学年に渡つて知られているが、その他に知られていることがある。

一つ目。ノートを取るのが異常に速く、まとめ方がつまごい事。

二つ目。料理が誰もが認めるほどうまい事。

前者は美月の下僕ということと合わせて知られている。そのうまさはテスト前になると多くの生徒が勇一の所にノートのペーパーを取りに来るほどだ。勇一はこの事を誇りに思っている。かなりの時間を費やしている工夫した結果が実を結んでいるからだ。これらももつと精進しなければなるまい。

後者はどちらかと云ふと今までに勇一と同じクラスになつた者しか知らない。彼は和洋中、古今東西の有名料理を作ることができる。幼い頃から多忙だった両親に迷惑をかけないために身につけた技術だ。こちらの方が年季が入つていてるせいか、勇一は料理の腕には自信がある。だが、それで職について食べていこうという気はない。

そんなわけで、たまたま今年の春に会つた実習のおかげで、クラスに知れ渡つてしまつていて、こと料理関係のことは頼りにされていた。

もしかしたら、全て任せてしまいたいという黒い思いがクラスの中にあるのかもしれないが。

「じめんねー、当口ならともかく、準備関係を手伝える自身は無いや

「そうそう、勇一は忙しいんだから余計な仕事を増やすと迷惑なんだとよ」

「なんだよ、って、その科白は正確にオレの気持ちを表していないだろ、と思つ。

確かに半分はそんな気持ちも入つていてるわけなのだが、そんなきつい言い方をしなくても。女子が怒るかもしれないのに。

勇一は、美月の事から、女子にめつぽう弱いことも有名である。

だから、二ノ宮は敢えて勇一に代わつて断ろうとしたわけなのだが。

案の定というか、女子達は二ノ宮をジト目で睨みつけ、鼻で笑う。

「料理のできない級長が勇一の気持ちを代弁してもねえー…」「何だと？ 代弁じゃないぞ。俺はこいつの言つたことを素直に表しているだけだ」

それは聞き捨てならないことだつた。

気がついたら言葉が飛び出していた。

「いや、確かに仕事が増えると困るけど、迷惑なんかじゃないよ?」言つてから自分の発言内容の愚かさに気がついた。女子達は「こぞと言わんばかりに食いついてくる。

「じゃあ、勇一くん手伝ってくれるの?」

「え、いや、それとこれとはまた別の話で…」

「だから、勇一は忙しいから無理だつて言つてるだろ」

「あんたには訊いてない！」

得体の知れないものに威嚇されたようこ、二ノ宮は押し黙つてしまつた。これだから、女子という存在は怖いのだ。

「で、どうなの、勇一君？」

数人が二ノ宮を威嚇して押さえつけている間に、残りが訊いてきた。

「うん。見事な連係プレーだ。

「…なにか、見返りは？」

「君の他の仕事が遅れないよう二ノ宮クラスみんなで協力するよう手配する。これでどう？」

「了解。店が何になるかによるけど、できる限りのことはする

よ

瞬間、集団は勇一と二ノ宮から離れ、たつた今受け取つた情報を発信するためにクラス中へ発信するためにどこかへ行つてしまつた。隣では二ノ宮が『言わんこっちゃ無い』とでも言いたげに見下ろしていた。

これはもう、諦めるしかないのかもしれない。

二ノ宮は苦笑しながら、机につづぶせになつて動かなくなつた勇一の肩に手を乗せた。

「お騒がせパンツ」

「いや、お人好しな性格が人生苦労するつて訊いたことはあつたけど、生で現場を見ることになるとは思わなんだ」

「「めん、せつかく氣を使ってくれて反感買つような役をやつてくれたのに…」

勇一は顔を机につけたまま謝る。「ノ富は軽く肩を叩いてやりながら、「人生なんてそんなもんさ」と達観な発言をする。彼も苦労してきたのだろうか、この十七年間。

結局、桜緑祭まで冗談じやない位の忙しさが自分に牙を向けたこととなる。美月の所に行けるのも、あと数日が限度かもしれない。「そんなに心配するな。模擬店の方はあまり気にしなくていいぞ。いざとなつたら森岡という最終兵器がいらっしゃるから。…今日はサボつているみたいだがな。」「寧に荷物は置いてあるが。」

「ノ富は主のいない森岡の席に田をやる。確かに机の上には盛岡のものである黒い革のバッグが無造作に投げ出されている。彼のサボりなど今に始まつたことではないので、気になったものは今日はノ富が初めてだろう。

「サボつてないよ。ただ、授業に出られなくしただけ」

勇一は机から体をむくりと起こす。「ノ富は直感的に予感がした。「正確には授業に出られなくしてあげただけ、って言つた方がいいかもね」

ああ、またこいつは森岡に何かやらかしたのか、と思つ。

「こには級長として、内容を聞いておかなければ。

いや、ただの興味本位なのだけれど。

「またお前はやらかしたのか……。で、今回は何したのか、級長に話しなさい」

勇一は森岡に暴力行為を行うのも今に始まつたことではない。しかしことじとく失敗に終わつてゐる。首を手刀で打つて氣絶させた

り、クロロホルムで眠らせたりしても一時間後には爽やかな笑みで勇一の前に現れて勝利ゼリフを吐くのだ。

「はつはつは！ 甘い、甘いぞ佐倉！ その程度で俺を拘束できると思つたか！ まず俺を拘束したいのなら美人を連れて来い、美人を！ 緋水で構わないぞ！」

その後勇一のアッパーが森岡の顎を直撃するのだ。

一年のクラス替えが終わつてから、こんな事は何度もあつた。今ではクラスの名物の一つと化している。

そんな事は露も知らず、勇一は対森岡の時にしか出さないであります暗い笑みを浮かべる。

「今日はスペシャルバージョン。口はガムテープで塞いだし、手足はロープで縛つてあるから、出られる確率は一パーセントにも満たない。今日こそ… 今日こそ、オレの勝ちだ」

二ノ宮は思う。勇一は、それは拉致監禁といつて、現在の法律では罪の一つだぞ、と。

なんとも実も蓋もナベもないツツコミである。

言つべきだらうか。

しかしこうも思う。この一人はこの事を楽しんでる節があるから、どうせ言つても無駄であろうと、自分が勇一と付き合い始めたのは今年からで、森岡とは小等部からの仲らしい。余計な口出しは無用なのかもしれない。

授業開始の鐘がなる。休み時間が終わる。二ノ宮が「ほどほどにしておけよ」と勇一に言つて席に戻るつとした時、後ろの扉が乱暴に開かれ、その男は現れた。

整つた顔立ちに、爽やかな笑みを添えて。この男の本性を知らない女子がいたら、真っ先に惚れてしまつような笑顔で。この笑みに、一時は一体何人の女子がだまされたのか。

黙つていればすごくいい男なのに。黙つていれば。

「甘いぞ勇一！」

教室を闊歩して勇一の席の前まで来て発した第一声はこれだつた。

ふと見れば勇一の顔には驚きと悔しさを必死で覆い隠そうと努力している様が見れる。

「俺を甘く見ては困るな！ 今日は頑張つてくれたみたいだが、ある程度、所詮マフィアの銃撃戦に比べれば、大した事無いわ！ お前が俺に勝つ事は不可能なのだよ！」

そりやあまあ、銃撃戦に比べれば大した事無いだろう、と二ノ宮が思ったとき、勇一のほうから「ぶち」という音が聞こえた気がする。

次の瞬間、勇一は森岡に見事なアッパーを喰らわせていた。今日はみぞおちの追撃付きだ。クラス中から、おお、という歓声が漏れる。二ノ宮もつい声を上げてしまう。

受けた相手が常人だつたらアッパーを食らつた後に仰向けてでも倒れて氣絶して保健室送りでもなつたのだろうが、相手は常人ではなかつたらしく、ただらを踏みはしたが持ちこたえた。またもクラスからおおつと声が上がる。

「大体お前、マフィアの銃撃戦なんて知つてゐるのかよ？」

「ふむ。いい質問だな」

勇一の質問に森岡は不敵な笑みを浮かべて顎をしゃくつた。周囲は一体どんな展開になるのだろうと息を呑んで勇一の机を見ていたが、勇一は森岡がなんと答えるか見当がついているようで、足の位置を微妙に動かしながら次の攻撃へ移る準備をしていた。

森岡は顔から笑みを消して真顔になる。

そしてついに言う。

「知るはずがないだろ？！」

勇一の足が的確に、そして見事に森岡の脛をとらえて打つことは言つまでもない。常人離れした者も脛だけは効いたのか、「ぬおおお！」と言いながら当たつた部分を押さえて床を転がる。さらに転がる最中に近くの机の脚に頭をぶつける。見るからに痛そうだった。

さすが勇一、森岡に對して容赦という感情が全く無い。

「どうしたんだ佐倉……。今日はいつも以上に気が立っているな。何かあつたか？」

森岡は「痛てー、おー痛てー」と膝を折って脛をさすりながら勇一を見上げる。端から見ればいつもと換わらない彼の仕草に、僅かな違和感を感じたらしい。

「別に。特に何もないよ。……それより先生、遅いよな」

「ああ、遅いな。何かトラブルでも発生したんじゃないのか？」

森岡は勇一の話題変えに素直に応じて、これ以上深くは追及しなかつた。彼のこんな部分はありがたいと思う。

鐘が鳴つて一、三分は立つていた。次の時間は数学で、教師は時間にうるさい谷口という二十七歳既婚教師だ。授業に一分でも出遅れるとその時間の質問には指し続けられるという罰則がある。なのにサボりはお咎め無しという変わったところがあり、最近は少し出てき始めたお腹が気になつてているらしい。

それはともかくとして、時間に厳しい谷口が授業に遅れるなんて珍しいことだ。いつもなら始まりの鐘と共に扉を開けて、わざと授業に出遅れた永遠のライバル・森岡と問題のすさまじいバトルを繰り広げるはずである。出した問題を森岡は全て偉そうに答え、授業の終わりには大学の入試レベルの問題にまで発展している時も少なくない。

「トラブルって…ダイエットに失敗したとか？」

「いい意見だ佐倉。生徒の前に出てこられない体にでもなつてしまつたか。それとも俺との勝負に怖気ついたか。どちらにしても傑作だな、こりや」

自分の想像に自分で笑う森岡。あながち笑い事でもないよな、と勇一はため息をつくと、扉が静かに開けられた。一年四組担任春野仁美二十五歳独身が教室に入つてきて、森岡に席に着くように行つた。美人の言う事は素直に聞く彼は瞬速のスピードで席に戻る。

「仁美せんせー、谷口先生はどうしたんですか？」

クラスの誰かが言つ。仁美は教卓の上に名簿をおいて、困つたよ

うに手を頬につけた。

「谷口先生はお葬式のため今日はお休みです。だから、この時間は自習。…はあ、この一時間が一週間で授業の無い貴重な時間だからゆっくりお茶を飲みながらテストでも作るフリしてネットゲームを満喫しようと思つてたのに……」

仁美は頬から額に手の位置を変えて極めてどんよりとした口調で言つ。彼女は教師陣の中でも保健室の佐藤、通称保健室のおねーさん（十三歳独身を抑えて学校の生徒（佐藤が男子に対し、彼女は女子から）高い人気を得て事で名を知られているが、動搖にゲームである事も知られている。放課後近くのゲーセンによく出没し、給料の三分の一をゲームに使つたなどという逸話も残されているくらいだ。

と言つた先生、一応公務員なんだし学校でゲームやつたら懲戒免職です。

クラスの中が自習だ自習だラッキーだよね、といつもで騒いでいる中、勇一は頬杖をついて深い思考の海に足をつけたところだった。

「非日常の足音」

今朝、いつもと変わらぬようで何かが違う日常で、思わず足を止めてしまった。

昨日、テルルと名乗った少女と知り合った屋敷は、黑白の幕を張つて、朝も早くから黒い服を着た弔問客が大勢来ていた。周囲とはかけ離れた非現実。一日でこの屋敷で行われているのは葬式だと判る。自分は屋敷の人間にとつては何の関係も無い人間なので、足を止めて眺めるだけで終わつた。無論、この屋敷に何人の人が住んでいたのか、テルルがいたかどうかは知る由も無かつたが、屋敷の所有主の姓が「今井」という事だけは知ることができた。

多分亡くなつたのは爺さんだと思つ。証拠など無いが、心中で確信はしていた。

今も不思議に思う。あの少女は、黒と白の幕を、弔問客が涙を流しながら屋敷に入つていく光景を自分に見せて何を知らせようとしているのだろう。

何をしていたのか全然判らない。

もしかして、葬式屋の娘さんだつたのではないかとさえ思つ。いくらなんでも、遠回しに伝えすぎだつた。

やはり昨日の事は何かの見間違いで、真夏の夜の夢…もとい、季節外れの冬の夜の夢であり、幻だつたんじゃないのだろうか。机の横側にあるフックにかけてあるバッグの中を探る。いつも入つているはずの使われないスポーツタオルは入つていない。昨日の出来事は冬の夜の夢でも、幻でも無かつたのだ、と再確認する時だつた。

今やスポーツタオルが、昨日と今日を、自分とテルルを結んだ唯一の接点だった。

勇一は手元に無いスポーツタオルの代わりにノートパソコンを出して、起動させる。せっかくなので脚本を早めに完成させてしまおうと思ったからだ。あと少しで完成する。今日中には部長に提出できるはず。桜緑祭までの負担を少しでも減らさなければならない。

キーを叩く。二ノ宮はこの時期から必死で勉強しているし、森岡は仁美にくつついて近頃のネットゲームについて議論しているし、クラスは自慢という名田で意味の無い時間をそれぞれ各自の過ごし方をしている。

見渡せば、いつもと変わらない日常だった。その中に自分もいる。考えすぎなのだろう。今はただ、桜緑祭に向けて動いている方がいいのだ。

勇一はタオルの事も、昨日の事も忘れるために、キーを叩き続けた。

放課後、出来上がった脚本の入ったCDを部長に届けるため、勇一は三階にある部室に向かう。部室に行くのはかなり久しいので、なんだか緊張する。

「演劇部」とボードのかかった部室のドアを開けると、潔癖な人だったら、鳥肌でも立ってしまうだろう、凄惨たる光景が広がっていた。はさみやら布やら、床にも机にも色々とどりどりの衣装を作るための道具や材料が散っていた。

イベント前の演劇部部室と言つのは、この学校では伝統的にこんな状態なので、勇一はさしたる反応も見せず、足の踏み場も無い状

態の床を少し片付けて踏み場を作りつゝある。

「あ、ああっ、ダメだよ勇一くん、勝手に物を動かしちゃ…」

制止の声がいきなり後ろからいきなりかかったので振り返ると、瀬の辺りでゆるく結んだロングヘアが印象的な、三年一組肩書きは演劇部副部長、役職は雑用、通称みつちゃんこと水口洋子がオロオロしながら立っていた。

「すいません、足の置く場所が無いので、少し片付けようかと」「絶対、絶対ダメ。物の配置が少し変わっていても、私のせいにされちゃうんだから…。田向くんのおしおきは怖いんだから、勇一くんも、変な意地悪はしないで？」

「」の言葉には、苦笑しか返せなかつた。田向部長の水口に対するおしおき、通称イジメは見た事は無いが、相当なものらしい。部のメンバーの一説によれば、彼女は『もうお嫁にいけない』ことをまでされてしまつたとも聞くが、内容を聞いたときは確かに驚いてしまつた。

とても とても、自分の口からは言えそうに無いことである。「冗談でも、美月に話したら一発で怒りそうな、そんな話である。ていうか、個人的に彼女はかなりおいしい位置にいるとは思うのだが。

「意地悪なんかしませんよ。みつちゃん先輩がそういうのだったら、部室はこの状態のまま保存しておきます。しかし、それにしても他の部員達遅いですね、何をやっているのだか」

勇一は肩をすくめる。演劇部の部員数は全一十五名、うち勇一は休部中、美月は入院中、森岡はサボりで、残りの一十一名は毎日顔

を合わせることになつてゐる。

ついに部長に反乱ようしくデモでも起こしたのかな、と勇一は思つたが、

「みんなは外で発声とか、体力づくりのために走つてゐるよ。そういうえば、勇一くん部室来るの久しぶりだよね。ここに来たつた事は、脚本が出来上がつたつて事かな？」

「うん。完成した。先輩、悪いんですけど、部長にこのCD渡しておいてくれませんか？俺、美月のところに早く行かなればならないので」

「判つたわ。勇一くんもすこい健気よね。私じゃ真似できないわ。私もよくお見舞いに行くけど、忙しくて毎日なんてとても行けないもの」

水口は勇一からCDを受け取ると、一いつ瞬つて笑つた。軽く咳込みもした。

彼女のようなセリフは様々な人から言われてきた。一ノ宮を初めとしたクラスメート、部員、病院の看護士達。言わないのは、森岡と主治医の先生である暮林くらいだ。勇一には、この言葉には微かに哀れみとか、同情の念が入つていて、言われたら苦笑を返すようにしていた。テレビに映る政府の意見に文句を言うのと同じ。言つても何が変わるわけでもなく、気休めにもならない。ただ自分と美月の心に小さな傷跡が残るだけ。

だから、苦笑して傷跡を隠そつとする。

「健気なんかじゃありませんよ。オレはただ、昔美円がやつていたことをやり返しているだけです」
「ああ……、そつか。『めんなさい』。変なこと言つちやつて。許してね」

水口は両手を合わせてぺこぺこ頭を下げる。勇一の言葉の意図を理解できたからだ。

「まあ、俺から見させてもらえば、みつちゃん先輩の方が健気に見えますけどね、日向部長にあれだけいじめられてるという噂がありますから、いつも一緒にいるんですから」

「えへへ……。健気、か。うん。言われてみれば、そつかもしれないかな」

彼女は笑つてから、突然咳をし始めた。

「だ、大丈夫ですか？」

「うん……、大丈夫、ちよこつと……」めんね……」

彼女は途切れ途切れに言い、勇一に背を向けて手で口を覆い、とても大丈夫そうに見えない咳を苦しそうにし続ける。だが、良くなる所がだんだん酷くなつてくる。ついにもう片方の手で胸を押さえ、とても普通には見えない咳をしている。立っているのも辛いらしく、膝を床につけて尚もし続ける。あまりにも酷かつたので、思わず声を荒げて「大丈夫ですかっ！」と何度も訊いてしまう。

オロオロしながらも何かできないかと混乱する頭で考え、今できることとして彼女の咳をし始める。

頭の中は多分、酷く混乱していたと思つ。

随分と長い時間がたつたと思つた。それ位勇一の神経は緊張していたのかもしれない。

彼女の席は少しづつ治まつていき、話ができる状態まで回復した。

彼女は口を押さえていた手を話し、ぐつ、と握り締めて、未だ背を

さすつている勇一に振り返る。

「ありがとう、もう大丈夫だから」

勇一は背から手を離すと、彼女はゆっくりと立ち上がり、額に汗のたまたた青白い顔で力無く微笑んだ。

微かに、鉄のような匂いがした。

「本当に大丈夫ですか？ 保健室に行つた方が…」

「大丈夫よ、一人で行けるわ。それよりもほら、美冴ちゃんのところへ早く行かなきゃ行けないんでしょ？ 急がないと面会時間も過ぎちゃうわ」

水口は胸を押さえていた左手で勇一を押して部室から追放するよに出してしまう。その力はとても青白い顔の人の力とは思えなかつた。心配しないで、ということを示したいのだろうか。

部室の扉が静かに閉められる。

本当にこのまま行つてしまつて良いのだろうか？ 背をさすつた時に制服越しに感じた脂汗で湿りかけた背中を、咳が止んだあと握り締めたまま決して開かれる事の無かつた右手を、鉄の匂いと、青白い顔で力無く笑つた顔を断片的に思い出した。

大丈夫なんかじゃないだろう。

思い切つて扉を開けると、右手をポケットティッシュでふいていする水口の姿があった。扉の開く音に反応してこちらを振り返つてゐる。まだ少し顔は青白いが、もう席はしていなかつた。彼女はティ

ツシューで吹く動きを止めて、首を傾げる。

「ど、どうしたの？ 何か忘れ物でもした？」
「え、いや……、何でもないです」

勇一はなんだか恥ずかしくなつて扉を閉め、部室から逃げるよう
に小走りでその場を後にする。

小走りをしながら勇一は少し安堵して、少し不安を覚えていた。
扉を開けた時、色とりどりの布の上に水口が立つていて、その手
にこびりついた血をティッシュで拭いてくる。これ程までに非現実
感があり、扉の向こうは異世界と考えてしまつ程なのに、どこかシ
ュールだと感じてしまうのはなぜだらう。

永遠に解けない謎なのだらう、多分。人間の感覚は実に奇妙に創
り上げられているから。

喉元通れば熱さ忘れるとは誰が作った言葉が知らないが、実に素
晴らしい言葉だ。人間の感覚を的確に表している。勇一が下駄箱で
靴を履き替える頃には、先ほどの混乱もどこへやら、すっかり頭の
中は落ち着きを取り戻していた。

昨日より數十分送れて校門を出る。早く美月のところへ行かない
と拗ねてしまつて手に負えなくなつてしまつ。
まさかさつきの事を遅れた理由に使うわけにもいかない。うまい
言い訳を考えなければ。

勇一は混乱の後で血液の巡りが良くなつた様に感じる頭を働かせ
ながら、いつものように黙々と歩いて水口総合病院へと向かつた。

「朱、白、ひとつ」

「そつか。脚本完成しちゃつたんだ。良かつたね。お疲れさま」
病室に入つてからそろそろ一時間が経とつとした頃、よひやく機嫌を直した美月は、料理雑誌を読む勇一に告げた。

内心ほつとした。一時間前の美月の様子は、

「……遅いです。何をやつていたのですか？ 佐倉勇一くん？」

「女性を、しかもこんなかわゆい女の子を一時間近く待たせるなんて、いい度胸していますね勇一くん。一体何があつたのか教えてもらひこましょつか？」

はつきり言つて怖い。半分笑いながら言つているのでさらに怖いたいした言い訳も考え方付げず、やはり水口の事はいえなかつたのでここは一言、

「それは年頃の男子の秘密といつことだ」

さすがにこの言葉はまづかつたのか、美月は今まで口を利いてくれなかつた。

一応脚本が完成した事を伝え、ノートを渡して彼女が話しかけてくれるまで雑誌を読んでいたが、どうやらその甲斐はあつたらしい。

勇一は顔を本から上げ、ノートのページを静かにめくる美月の顔

を見た。口では良かつたね、と言いつつも、誰の目から見ても明らかに残念だ、と言つ表情を見せている。とても良かつたと本心から言つていいようには見えない。

それもそろしかもしない。彼女は明日から一人きりなのだ。桜緑祭の日まで、この白くて殺風景な部屋に一人きり。たまに来る看護士も白衣を身にまとつてゐる。気が狂いそうだ。白は汚れ無き物の象徴と言つが、自分はとてもそう信じる事はで着ない。だったら何色が相應しいのか、と聞かれると考えることができない。この世に汚れ亡き者など存在しないのだから、色に例えることなどできない、と答えるのだろうと思つ。

要するに、勇一は白が嫌いだつた、
白い世界に一人ぼつんと取り残されているような美月に声をかけ
る。

「いろいろ考えたんだけどさ、
「明日から来なくていいからね」

勇一が本題を切り出す前に、美月は彼に意見を言わせないと思つたのか、言葉を遮つた。

口をつぐんでしまつた勇一に、美月はさらに言葉を紡ぐ。

「脚本が完成しちゃつたら、劇の練習に忙しくなるでしょ？　だから、桜緑祭が終わるまでは来なくても大丈夫だから。うん。これは、
私からの頼み」と

美月はノートから顔を上げ、昨日とは違ひ澄み切つた空を映す窓を見てしまつ。そのせいで表情を読み取ることはできなかつた。

「でもさ、何日に一回くらいは来れるって。別にオレ主役を演じるわけでもないからさ。脇役中の脇役だし」「来なくていいの！」

「きなりの美月の大声が室内の空気と勇一を震わせた。彼女はゆっくりと、呆気に取られている勇一の顔を見て微笑する。

「勇一に迷惑かけたくないのよ、うん。大丈夫、来なくていいって言つたけどさ、桜緑祭が終わるまでの三週間、たつたそれだけの間我慢すればいいんだから」

「」の言葉はむしろ、勇一に言つているといつよりも、美月が自身に言い聞かせていると言つ感じがしたが、敢えて口には出さなかつた。

「判つた。美月が言つのなら、オレはそれに従つよ。なんたつて、オレは美月の下僕だから」

迷惑でもなんでもない。だが、美月の意見が最大限に尊重してきたかつた。

「ありがとう。私さ、桜緑祭のときこ、勇一が手がけた最高の劇を見てみたいのよ。勇一の言おうとしていたこと、当ててみせよっか？ 私を桜緑祭のときに病院から連れ出そうとしてもしているんじやない？」

「…正解」

心の中で頬はエスパーですか、と付け加えておく。

「暮林ドクターにでも頼んでみようと思つ。あの人なら、オレの意

見も聞いてくれると思うしや。いろいろ考えたけど、美月を桜緑際へ連れ出した方がいいでしょ？」

勇一は名案と思いついたばかりに自分の案に自信があるのか、誇るようく笑う。

だが、反面美月の表情は固かつた。少なくとも、笑っていない。勇一は彼女の表情の変化に敏感に気づき、不思議そうに彼女の顔を見る。

「あれ？　いい考え方かと思つたけど、なんか駄目そうな部分とかある？」

「え？　いや、その、違つの。暮林先生がオーケーしてくれたらいなつて考えていたのよ。ただそれだけ」

そう笑つてノートに田を戻す美月の様子がいつもと少しおかしいよつこ思えた。

まるで、無理に元気を装つて見えたのだ。

まるで自分に何かを悟られたくないと思つて見えた感じたからだ。

日が、西に傾いて世界を淡い橙に染め上げていた。その光は窓を通して病室の中にも届き、白い世界を一時的に橙色に染め上げる。橙色というよりは、赤。鮮血を思わせる赤い色。

赤く染め上げられたベッドの上に、緋水美月は上半身を起こして座っている。

たつたそれだけなのに、勇一は恐怖を感じた。

寒気がして、背筋を軽く震わせた。

ベッドから窓の方へ目を向ける。赤い光を見て、なぜか昨日の、

テルルを思い出した。

彼女の紅い瞳を思い出した。

あれは多分、カラー・コンタクトではないのだろう。

頭の中で芽生えた僅かな確信。こんな時に確信を持つなんて思いもよらなかつた。

彼女は、テルルは多分、人間じゃないのだろう。もちろん、動くフランス人形でもないだろう。

なぜ、昨日会つた時に確信を持たなかつたのだろう。案外人間は、不可知なる物に出会うと、適当なこじつけをつけて、夢だ幻だと決め付けて逃げ去つてしまつ。自分も實際そうだつた。真剣に見ようとは思わず、面白半分に科学で理由をつけて片付けてしまう。霊能力者を馬鹿にする。自分もそんな者の中の一人だつたのかも知れない。幽霊番組を見て一時の涼しさを味わつたり、肝試しをして友人の体験談をして友人と体験談をもとに笑いあつたりしていた人間だつたのかも知れない。

でも。

もう、笑うことはできないだろう。確信を持つた、ただそれだけで。

「 勇一、大丈夫？ 勇一つたら！」

ぱつちーん。

一気に現実まで引き戻された。頬を引っ叩かれた。痛くなかったので痛いとは言わない。代わりに美月が手をさすつて痛がつているのが彼女らしい。「いたいのいたいのとんだけ！」とかからかってあげてもよさそだが、今度は手ではなくて何が飛んでくるのか判らないのでやめておく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4317b/>

「天使の唄」

2011年1月15日23時51分発行